

古代・中世の猿投窯にみる中国陶磁の模倣

柴垣勇夫

はじめに

8世紀末から9世紀初めにかけて、いわゆる灰釉陶器を生み出した猿投窯において生産された器形の中には、それまでの国産陶器である須恵器の器種の継起的な変化を示す器種と、新たに誕生する器種とがある。この新器種の誕生と灰釉陶器の生産、さらには緑釉陶器の生産は相互に関連があるものとみられ、その背景に古くから中国陶磁の影響が考えられたり、唐風から和風へと捉えられたりしてきた。ところが新器種の登場については、その大部分が仏具や祭事具として新たに舶載されたり、わが国で製作された銅器・銀器などの貴重な金属器を陶器で写し、金属器の入手困難な階層へ供給したとする意見があり、また猿投窯に特徴的な、緑釉陶器や灰釉陶器の器面を飾る陰刻花文の起源もまた唐代の金銀器や正倉院の金銅品などの金属器にあるとする意見もある。が一方で、九州・博多や平安京その他西日本地域での出土例からみる越州窯青磁や北方系白磁の国内への輸入量は、かなりのものであったとみられている。そして東日本への流入の少なさを補うように灰釉陶器・緑釉陶器の流通は時代を追うにつれ、畿内以東の主要な集落遺跡に広がっており、特に碗・皿・瓶の需要は大きなものがあつた。その需要の背景には、より質的に高い中国陶磁に酷似した施釉陶器の使用を希望する階層の増大があつたと考えられ、彼らの使用する什器の基本は中国陶磁によく似たうつつであつた。以下に新器種の中国陶磁写しは奈辺にあつたのかを考えてみようと思う。特に器種の類似性について眺めてみたい。

1. 奈良時代の須恵器にみる中国陶磁の模倣

(1) 外国陶磁の影響と器形の模倣

百済・伽耶地方からの須恵器の製作技術がわが国に伝わってきたのは、これまで、ほぼ5世紀の中ごろのこととされてきた。そして日本書紀によれば雄略天皇7年(475)に百済の手末(たなすえ)の才伎(てひと)、新漢(いまきのあや)陶部(すえつくりべ)高貴(こうき)らを上桃原(かみつももはら)、下桃原(しもつももはら・共に大阪府南河内郡)などへ遷居させた記事があり、時代はともかく、朝鮮半島からの技術者によって日本に須恵器製作法が伝えられ彼らの住み着いた南河内において、生産が行われたことが知られる。^(注4)

しかし、この数十年の間に各地の遺跡から、韓国の陶質土器にそっくりの国産初期須恵器が発見され、南河内・和泉のみならず北九州や瀬戸内・和歌山などの地域で、生産が始まっていたことが判明してきた。そして今や5世紀の前半には、日本で須恵器の生産が開始されていたとするのが一般的な説となりつつある。とくに北九州・福岡県や大阪府・堺市での最も古い時期に属する須恵器を焼成した古窯跡の発見は、それを物語るものとして注目されている。おそらく、西日本の各地に渡来した伽耶地方の人々によって、それぞれの地に最初の須恵器生産の技術がもたらされたと考えられるのである。こうした古墳時代の須恵器にみられる器形その他の特徴には、初期のものに韓国陶質土器の強い影響が認められる。しかし、5世紀後半以後の製品には、器種の組合せに韓国の影響を残存させながらも日本独自のフォルムを持つようになり、短期間のうちに日本化が進んだことを示している。従って、韓国の影響を直接的に認めることができるものは、

波状的に押し寄せる文化の伝播によってもたらされる特殊な器形を写したものである。律令国家への動きが顕著になる7世紀後半から末期には、朝鮮半島から伝来した金属製食器、一部には中国本土から伝わった金属製食器が須恵器に写され、大陸的食事法が普遍化する動きが認められる。特に碗形を写したつまみ付蓋付杯や盤、鉄鉢形の鉢がそれらにあたるという。^(注8) こうして新たに外来文化摂取の動きが、中央国家主導で展開されることとなった。^(注7)

次に、外国陶磁の影響を直接受けるのは、7世紀末から8世紀前半にかけて顕著となる中国からの文物であった。韓国に変わって中国からのうつわの様々な形態の伝来は、日本における食文化の大きな変化をもたらし、碗その他の器種には高台が付されて形そのものが極めて安定したものとなった。こうした中国陶磁の影響を最も端的に示しているのは、碗であり、体部の球形化する短頸壺である。8世紀には、宮廷における規格化された土器様式が確定し、新しく碗形の器形が登場する。この時期以後、急速に中国からの文物の流入があり、新器種の伝来があったと思われる。その根底には、律令国家の確立する7世紀末から8世紀にかけての、食生活の変化のなかに認められる供膳具の定型化であろう。この碗形の器種は金属器の写しだとする意見が多いが、中国陶磁そのものとみることのできる碗の器形を示す作行きの明瞭なものが8世紀中葉以降に登場してくる。^(注9)

一方、短頸壺は、8世紀初めに須恵器の短頸壺の新しい形として蓋付で高台付のものとして登場するが、当初は、蓋付杯にみられる扁平なつまみの付く蓋で胴肩部の角張った器形であった。しかしこの器種は、やがて宝珠形つまみの付く胴肩部が丸味をもった球体の器形に変化していった。この段階には、おそらく唐三彩の蓋付短頸壺(万年壺)が宮都に請来されており、この中国陶磁の器形の影響を受けながら、球体化した器形の短頸壺が製作されたと考えられる。

8世紀前半、これまで東海地方への供給を主として生産されていた猿投窯製品は、その豊富で良質な陶土をもとに律令国家中央機構への供膳具の供給地として質の高い須恵器生産をみせるようになった。大阪・陶呂窯でも焼成された中国の白磁製蹄脚硯を写した陶製の蹄脚硯や、蓋と高台に特徴をもつ短頸壺など、新しい形態のものも8世紀になって猿投窯の中核部で生産されるに至った。やがて原始灰釉陶器とよばれる自然釉のよく掛かった白色胎土で整美な釉調の製品が製作され、灰釉陶器の完成が間近いことを示している。特に鳴海32号窯と呼ぶ標式窯では、白色胎土で黄緑色の灰釉のよく掛かった蓋や広口短頸壺が焼成され、水瓶、双耳瓶といった新器種が登場し、8世紀第4四半期の折戸10号窯に至って、浄瓶、多口瓶といった仏器の主要製品が登場した。こうした仏器は、高級仏器として、金銅製品の模倣品とされ、金属器の代用品としての陶器模倣品という考え方が支配的である。しかし、本来、仏器として製作された中国陶磁の、特に白磁の写しとしてこれらが製作された可能性もあると思われる。その理由はまた次にみる唐三彩や古越磁の青磁三足壺の模倣品の存在にある。^(注10)

(2) 唐三彩と奈良三彩

日本における最初の施釉陶器は、低火度による緑釉陶器で、7世紀後半の緑釉陶棺(台片・大阪南河内郡・塚廻古墳出土)や緑釉(奈良・川原寺出土)がみついている。これらは朝鮮半島からの技術伝播で統一新羅製の緑釉陶器の影響下に作られたものであった。これを基礎に、やがて8世紀に入って唐三彩が大陸から請来されると、新たに正倉院に代表される奈良三彩が製作された。現在までに日本に請来された唐三彩の発見例は数少ないが、しかし、徐々に増加の傾向に

あって、主要な宮都や官衙、寺院での使用がかなり多かったことが推定されるに至っている。九州・太宰府跡や奈良・平城宮跡、大安寺跡などから唐三彩の長頸瓶、陶枕、三足壺、碗などが出土していて、これらの器形を写して奈良三彩が作られたものと思われるが、現在のところ、奈良三彩の器形は意外に少なく、正倉院三彩にみられる鼓胴、塔、瓶、鉢、皿、碗のほかは、蓋付広口短頸壺（蔵骨器）、小壺、盤、多口瓶、浄瓶程度である。しかし、特に出土例の多い蓋付広口短頸壺は、須恵器の広口短頸壺からの器形変化とする意見が強いが、唐三彩にみる万年壺の模倣とみるべきもので、その原型を中国陶磁に求めるべきものであろう。特に稚拙ではあるが三彩の釉掛けの配列や、高台の高さなどは須恵器の器形とは異なったものとなっている。さらに唐三彩や古越磁にみられる獸足を配した三足壺は、これも蔵骨器として用いられたと思われるが、猿投窯などで製作された須恵器の獸足形の三足壺に的確に写されているものである。

(3) 模倣品とその使用階層

こうして古墳時代とは大きな違いを器種構成に見せる奈良時代の供膳具は、新たに出現した高台をもつ扁平な杯・碗・皿・盤などの食器類、長頸瓶・水瓶・浄瓶などの仏器、広口短頸壺などの貯蔵容器類にその特徴的な姿を認めることができるが、これらの器種の出現の背景は、基本的には国内における段階的に到達した、ロクロ技術の向上に基づく継起的な発展形態とみられる。しかし、その誕生の契機は、外来文化、特に中国陶磁の請来に影響されたと考えられ、類似の器形が中国陶磁に認められるのである。伊野近富氏によれば、律令国家体制のもとの供膳具の多器種構成という現象は、容器の階層性という理解がなされている。ここでは、唐三彩と奈良三彩にみる原型と模倣型という関係や、金属器や中国陶磁と須恵器・土師器の関係、さらには中国陶磁と緑釉・灰釉陶器の関係といったように、大陸製品を原型として製作された模倣型について、律令国家体制に基づき貴族層などがその階層によって原型と模倣型の使用器種を規定されたとみられている。すなわち、容器の種類によって所属階層が規定されたと考えられているのである。

例えば、^(注12)「金・銀などの金属器、朱漆器、瓷（中国陶磁と、日本で生産された模倣型・特に緑釉陶器と灰釉陶器）、陶碗（須恵器碗）、土碗（黒色土器）、碗形（土師器）という序列」が『延喜式』編纂時の10世紀までにおける日本の主として貴族層のなかにみられる階層性であるという（伊野）。それは、上位のものが稀少性なるがゆえに、厳格な規格統制がとられたとみられる。従って、中国陶磁のすべてに渡って模倣型が作られたわけではなく、限られた器種の模倣品が作られたにすぎない。次の緑釉陶器・灰釉陶器における模倣品もまた限定的であるのである。

2. 緑釉陶器・灰釉陶器にみる中国陶磁の模倣

(1) 中国陶磁輸入の時代的变化

中国陶磁の日本への輸入は、7世紀末の律令国家体制が確立する時期に始まると考えられるが、その根拠を示すものとしては、現在のところ法隆寺献納物中の青磁盤口四耳壺や、唐三彩の壺、硯や陶枕などの製品があげられる。しかし、これらは亀井明德氏によれば請来陶磁と呼称されるべきもので、いわゆる輸入陶磁とは区別されるべきものとされる。したがって、これらは貿易によって日本国内へ運ばれたものではなく、単発的に移入された、贈与品などの性格をもつものとみられるものである。^(注13)こうした請来品は、極めて数少なく、当然これらを掌中に納めることのできる階層は限られていた。ところで、唐三彩にみられる型押しによる印花文やメダクションと

呼称される貼付文（貼花文）が奈良三彩に写されていないこと、唐三彩が副葬用の明器、仮器であるのたいし、奈良三彩は、祭事に使用する実用器であること、奈良三彩は豪華絢爛とはほど遠い素朴な釉調と形姿であることなどから、田中琢氏は奈良三彩と鉛釉陶器の技法は、中国からの技術者の渡来によるものではなく、唐土に渡った我国の技術者の短期間の技術習得によることが一因となってこうした唐三彩の優れた多くの手法が脱落して、緑色を基調とした奈良三彩が作られたと主張する。^(注14)しかし、これら奈良三彩が、いまだ窯体が不明であることから、宮都の中におかれた官衙工房で生産されたと考えられる以上、国家機構の要請によって製作された製品であるといえる。請来された唐三彩への憧れは強いものがあり、日本的なアレンジを見せながら、模倣されていったのが奈良三彩である。

さて、本格的な輸入の始まるのは、9世紀にはいつてからとされる。9世紀の輸入陶磁器の特徴は、官貿易によるものであり、そのことは必然的に器種を選定して模倣することが行われていたということにつながるものと考えられる。

越州窯青磁の中でも晩唐から五代にかけて初期輸入陶磁器として日本各地、特に西日本各地から出土しているものは、碗・皿・合子・壺の類で、その他湖南省長沙銅官窯製品や邢州窯白磁製品が輸入されている。中でも越州窯青磁の模倣が最初に緑釉陶器で、やがて灰釉陶器においても写しだされていき、主として官衙へ向けて供給された。^(注15)それらは、越州窯青磁のなかでも数多く輸入された青磁碗や同じく皿を模倣したものであったが、当初は少量生産であって主要な器種が流通の基本として確立されるには、かなりの時間を要した。

（2）猿投窯における緑釉・灰釉陶器にみる中国陶磁の写し

越州窯の製品で緑釉陶器や、灰釉陶器が模倣したものは、すでに述べているように青磁碗であり、同じく輪花碗・輪花皿であり、稜碗・稜皿・托・三足盤・手付き水注・唾壺・合子・香炉であり、陶枕であった。9世紀前半代には、越州窯青磁を中心とした多量の中国陶磁が輸入されたことは、中国貿易の入口である北九州・博多の鴻臚館跡の発掘調査で明らかとなりつつある。^(注16)さらに平安京の玄関とされる京都・山崎津（大山崎遺跡群）では、最近の発掘調査で、小面積の中から多種多量の陶磁器が出土していて、ここにも輸入陶磁器である越州窯青磁や白磁が多量に運ばれていたことが判ってきた。さらに国産の緑釉・灰釉陶器が多量に発見されていて、平安京へ運び込まれる物資の交易港であることが実証され、西日本、東日本と宮都を結びつける中継地として栄えた港町であることが明らかになった。^(注17)この地には「唐津里」の地名も残り中国製品の貿易港でもあったという。

こうして、中国陶磁が宮都の上流階級の日常容器として使用頻度が高まるにつれ、国産陶器での模倣品が、中国陶磁の手に入らない階層の需要に応じて生産されるようになる。

最初に越州窯青磁の模倣を行いだしたのは、京都・洛北や洛西郊外大原野周辺の窯業地帯の緑釉陶器であった。奈良三彩は8世紀末で生産を停止してしまうが、平安遷都に伴い、創建時の宮城や寺院の堂宇の屋根を飾る緑釉瓦の生産が大阪・吹田市や京都・洛北の地域で始まった。おそらく平城京において奈良三彩の製作に携わった工人たちの指導によって緑釉瓦の生産が行われたと考えられるが、この技術をもとに、緑釉単彩の陶器や白釉緑彩と通称される緑釉の濃淡によるわずかな文様を描いた彩釉陶器が、京都周辺で生産された。^(注18)

平安京における緑釉瓦の生産という歴史を背景に、これら緑釉陶器の生産は、特殊な三角形の

小形窯や、須恵器を焼成した窰窯で始まった。ここでは軟質なものから硬質な須恵質のものまで、種々の緑釉陶器を焼成しているが、軟質のものが量的には多く生産された。しかし、渡来技術者の指導があったのか、器形も釉調も精巧なものが製作されていた。そして、京都に引続き越州窯青磁を写した緑釉陶器の生産と新たな灰釉陶器の生産を開始したのが尾張の猿投窯であった。この尾張に次いで技術伝播を受け、緑釉陶器の生産をおこなったのが、美濃国であり長門国、近江国である。椀、皿、唾壺、香炉といった器種が中国陶磁を日本風にアレンジして模倣され製作された。猿投窯では、器面の内外全体をへら磨き調整して、緑釉陶器の素地をしいわば緑釉陶未製品を焼成している黒笹14号窯や黒笹90号窯、89号窯の存在から灰釉陶器の変遷と同様に緑釉陶器の変遷も明らかにされているが、越州窯青磁の忠実な模倣品とやや日本風にアレンジされた製品が生産されていた。^(注19)

緑釉陶器の製作技術が尾張の猿投窯にもたらされるよりも若干早く、本格的な灰釉陶器生産が黒笹地区を中心に猿投窯で開始された。人工施釉された緑釉陶器を青磁、同じく灰釉陶器を白磁と記録している文献の最も古い例は「安祥寺伽藍縁起并資財帳」の、貞観13年(871年)で、ここでは、中国製の青磁を青茶碗、白磁を白茶碗と表現していて、これに対する日本製の施釉陶器を前述の如く青磁、白磁と呼称していた。^(注20)この白磁が中国製白磁を意識していたと考えられるが、斎藤孝正氏は、灰釉陶器の中で初現的な灰釉椀は、緑釉椀とともに体部に丸味をもつ口縁の外反するもので、高台も低い角高台が付されており、このタイプが越州窯青磁や白磁のなかに形態的に類似するものがなく、あえてさがせば、越州窯系青磁碗I-2b類に比較的近いとしている。しかし、これとても初現期の椀の腰の丸味とはかなり異質だとしている。すなわち、国産施釉陶器の初期段階には緑釉陶器、灰釉陶器共に青磁、白磁を厳密に意識せず^(注21)に中国陶磁を漠然と模倣しているということになる。しかし次に述べる陰刻花文は、主として緑釉陶器に対して刻されていたものであったようで、灰釉に刻された陰刻花文は極く少数であって、特殊なものに限って灰釉にも陰刻していたといえそうである。

3. 陰刻花文と中国陶磁

(1) 陰刻花文の起り

猿投窯の中心地区にある黒笹14号窯では、9世紀前半期の主だった灰釉陶器製品を多量に生産していた。中に素焼きの製品がかなりの量焼かれていて、すべて表面がへら磨きされているものであったところから、これらは緑釉陶器の素地であることが十数年前の整理で明らかとなり、この黒笹14号窯では、緑釉陶器の未製品が焼かれ、この窯の近くか、別の場所でこれらの未製品に緑釉が施され、焼成されたと考えられるに至った。

この未製品には、見込みや外側面に陰刻花文が丁寧に施されたものがあって、いかにも平安貴族人好みのうつわが生産されていた。陰刻花文の施釉陶器は、その始源が京都にあったとしても、継的に生産したのは猿投窯であった。なかでも黒笹14号窯が最も古い陰刻花文を出土しているが、その起源については、毛彫り状の細かい文様で、中国陶磁にその文様の一致するものが少ないことから、諸説あってまだ定説はない。しかし最近では、中国製ないし国産の金属器、なかでも金銀器の内面にある毛彫り文様の影響が最も強いとする意見が有力視されている。一方、正倉院に収蔵されている金銅製品の雲花形截文の毛彫り文様中にみられる宝相華文^(注22)にその類似文様を

見出し、緑釉陶器の製作にあたっては、金工品の職人が陰刻花文の毛彫り作業に関与していたのではないかとする推論がある。また、9世紀の京都や奈良の仏像彫刻の光背に陰刻花文と類似の宝相華文が描かれていることに注目し、^(注23) 仏像の彩色を受け持った画工が緑釉陶器の陰刻花文の施文に何らかの関係をもっていたと考え、両者に共通性を認める意見もある。^(注24) さらに、律令国家機構の中では9世紀初めに画工司が廃止されていることから、画師や画工の一部が緑釉陶器生産に流れていったと推定する研究者もいる。^(注25)

これらは、いずれも文様の類似性からその起源を説いているもので、うつわという機能は別にして、文様に視点を置いている説である。それにしても、その起源を国内の文様に求めている点で、陰刻花文国内発生説とでもいいうるものである。

一方、越州窯青磁にみられる劃花文にその起源を求める説も依然として根強く残っている。晩唐期の越州窯青磁の劃花文の影響があって初めて陰刻という行為がなされたという見解である。^(注26) 奈良三彩が唐三彩にある印花文や貼花文を模倣しなかったのに対し、緑釉陶器において初めて陰刻文を陶器表面に表現し、かつ緑釉陶器以外には、わずかな灰釉陶器を除いて原則として行わないという行為の背景には、律令国家の規律のなかに陶器生産も厳格に組み込まれていたことを示しているといえよう。そして、この規律の根本として緑釉陶器が写していたのが越州窯青磁であるとすれば、陰刻花文もまたその起源を越州窯青磁に置かざるを得ない。古代の陶器生産が、律令国家機構の規制の中で捉えられ、律令的土器様式と捉えられることと一致する。

(2) 陰刻花文と越州窯青磁碗の劃花文

鴻臚館跡出土の図1—右1にみる文様は、9世紀後半から10世紀の晩唐・五代の越州窯青磁碗A1類内面にみられる劃花文である。三弁の切り込みのある丸頭形の花弁を7方に配しその下に同じような切り込みのある花弁が3枚重なり、都合4枚の花弁を表現しているものである。^(注27) 図1—2は黒笹14号窯の緑釉素地の輪花皿にみられる陰刻花文で9世紀前半のものである。三弁の切り込みのある丸頭形の花弁を四方に配した猿投窯の初期の文様で、この四方へ配する形はその後陰刻花文の基本となる。両者の関係には時代的なズレと文様構成が宝相華文と異なる点が問題とな

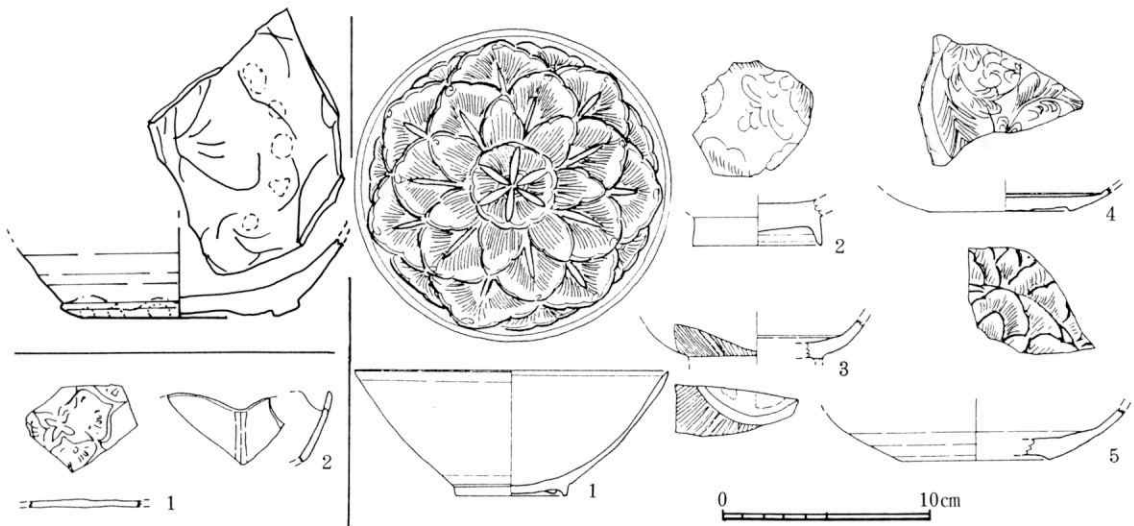


図1 越州窯系青磁類にみる劃花文の例（鴻臚館跡出土品。報告書および注29文献から）
左下白磁(2点)、他は青磁

って否定的な見解が多い。^(注28)しかし、花卉の構成は酷似しており、両者は深い関係があるとみられ、中国陶磁での劃花文様の中におそらく9世紀前半にさかのぼる先駆的な文様があるものと思われる。図1—左上、左下1は、9世紀中葉から同末葉に位置付けられる鴻臚館跡出土の青磁碗AⅡ類や白磁蝶花皿片であるが内面に劃花文や四弁花文の型押し文のある例で文様系譜の傍証としてあげられよう。なお、8～9世紀の須恵器の器種に影響を及ぼし、その模倣がみられる中国陶磁に長沙銅官窯の製品があるが、^(注29)灰釉陶器の双耳壺がやはりその影響とみられている。^(注30)長沙銅官窯製品には、国内にもたらされた水注などに貼花文や鉄絵文様があり、緑釉陶器の陰刻文にもその影響があった可能性がある。



図1-2 猿投窯陰刻花文片

4. 古代灰釉陶から中世山茶碗に至る猿投窯での中国陶磁の模倣

(1) 9～12世紀にみる碗類の中国陶磁模倣例

すでに、斎藤孝正氏や前川要氏らによって猿投窯における碗類の段階的模倣の系譜は明らかにされているが、それらをここに整理し、一部新しい資料を示すこととする。^(注31)

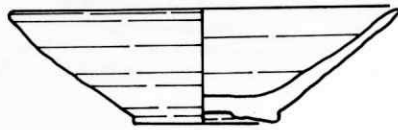
図2～3は、斎藤氏の系譜図を参考に中世山茶碗の系譜を加えたものであるが、11世紀後半以後白磁碗の模倣が極度に進むことを示している。図2—6は、これまでも紹介されてきた黒笹14号窯出土の、蛇の目高台の灰釉陶器であるが、貼付け高台とされていた高台は、削りだし高台であって、猿投窯においても削りだし高台の存在が確認された。また、図3—3.4は、蛇の目高台の出土例が最も多いところの黒笹90号窯出土の輪花皿である。緑釉陶器の素地と見られるもので、内外ともにヘラ磨きされている。数少ない蛇の目高台製品のうちでもこの窯跡からは、碗と同量程度の皿類の製作が目立つが、本図はその例である。図3—11は東山G—105号窯出土の白磁玉縁口緑碗の写しであるが、猿投窯のなかでかなり広汎に焼成されていたものであり、器形の模倣に段階的な差があることを示す資料である。これまで紹介されてきた例よりも高台の作りが、やや厚めに作られた例である。ただ、口縁部の作りは五輪花となっている。図3—12は、東山G—79号窯出土例で、輪花はなく高台がより白磁碗に近く、輪高台の幅広のものである。

越州窯青磁の写しから時代を追って輸入される製品の違いに沿い、やがて白磁製品の写し、そして龍泉窯青磁の写しへと、模倣の対象が移っていくことを示している。

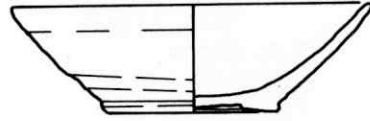
(2) 猿投窯における中国陶磁の模倣対象の変質

11世紀中葉に畿内でも瓦器碗が出現すると、地方での陶器生産の器種構成も少器種なものとなり、11世紀末には、碗・小碗（やがて皿にかわる）を主体にした生産に変化する。そしてわずかな量の特殊品を上層階級の製作要請に基づき生産した。猿投窯においても、灰釉陶器から無釉の山茶碗と通称される碗類の生産に転換し、^(注33)白磁四耳壺や白磁盤口瓶の写しなどが上層階級の要請に基づき少量生産され、東海地方を中心に近畿以東へ供給された。こうした変化の背景には、「相対的に低下した旧勢力と、台頭著しい新勢力との相違」のなかで陶磁器の優劣（「容器の質」）に加えて、量の多寡が重要な要素となって、「容器の階層性」が表現されるようになったとされる。そして、「その変化は稀少性の喪失した中国陶磁によって、もっとも鮮明に理解できる」という。^(注34)

西日本では、遣唐使廃止後停滞していた私貿易が、中国本土の政情不安から解き放されて江南地域の唐商等の積極的な輸出貿易への参加によって活発化し、中国陶磁の大量な輸入を可能にし



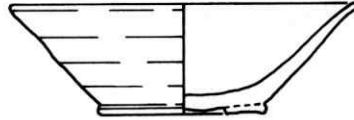
1. 越州窯系青磁碗 I-1a類



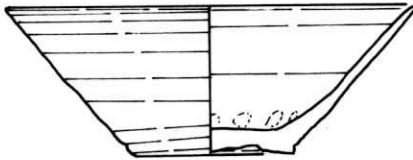
6. K-14号窯出土灰釉碗



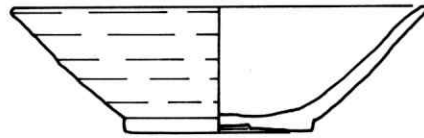
2. 同上



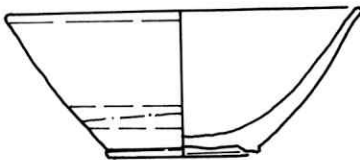
7. K-7号窯出土灰釉(?)碗



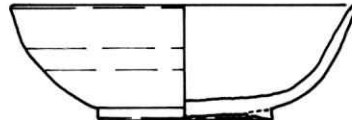
3. 同上



8. 篠岡(尾北)窯出土灰釉碗



4. 越州窯系青磁碗 I-1b類



9. K-90号窯出土緑釉素地碗



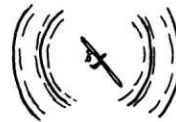
同上外底部陰刻記号



5. 白磁碗 I類



10. K-90号窯出土緑釉素地碗



同上外底部陰刻記号

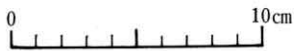


図2 猿投窯にみる越州窯系青磁の模倣(I) (1~3は注33文献、4~5は注10文献から)

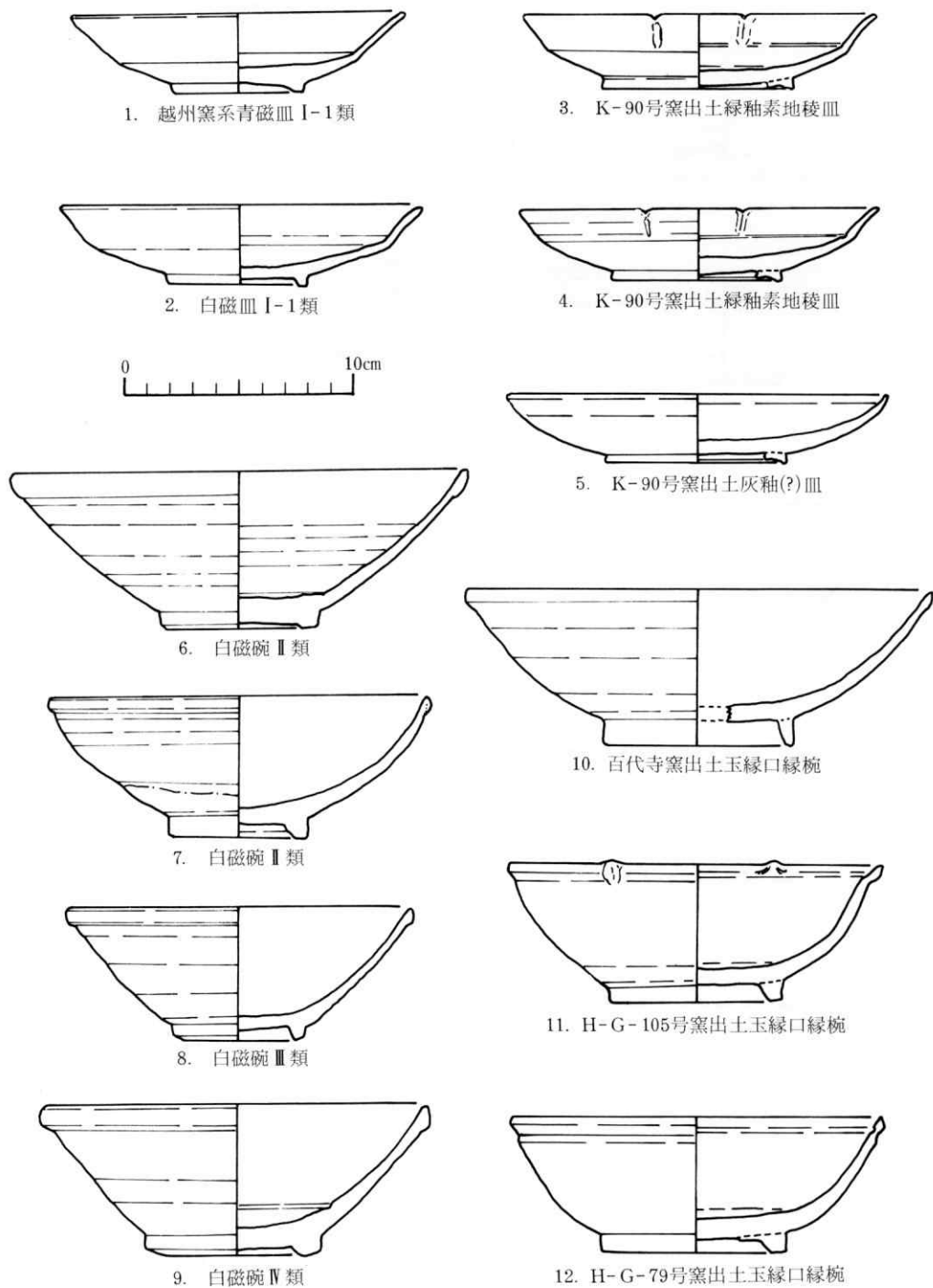


図3 猿投窯にみる越州窯系青磁の模倣(II)および白磁碗類の模倣(1, 2, 7~9は注10文献から。6は鴻臚館跡II 1992から)

た。さらに12世紀には、平氏による日宋貿易の高まりにより、ある程度大衆化した中国陶磁の流入から、もはや模倣品ではなく、中国陶磁の現物そのものを直接受容するようになっていった。しかし、東日本では中国陶磁の流入量の少なさから、猿投窯とその周辺窯からの模倣品にお供給を求めた。11世紀にはいってなお、猿投窯周辺における中国陶磁模倣の灰釉碗の生産が顕著で、輪花皿や稜皿も前代から引続き生産された。また、近江・猿投・東濃では、碗類の緑釉施釉品が生産され、主として東日本向けに供給された。しかし、やがて11世紀末になると、地域向けの無釉の碗と小碗（やがて小皿化する）生産に変化し、中国陶磁の青磁、白磁碗類の模倣型が量産化された。また、一部に中国陶磁の白磁玉縁碗の忠実な模倣品が生産されたりした。

つづく12世紀末に至って、西日本では中国陶磁の使用が一段と顕著になり、以後中世を通じて青磁・白磁製品が使用される。しかし東日本では、猿投窯から移行して興った瀬戸窯で生産された中国陶磁の忠実な模倣品である施釉陶器の瓶類が流通し、11～12世紀の古代末期の現象が引続き継承されていった。猿投窯や東濃窯の灰釉陶器生産窯に代わって、鎌倉政権の誕生と期を一にして登場する中世唯一の施釉陶生産地である瀬戸窯の製品は、やがて多くの器種を生産し東日本を対象として供給されたのである。ただ、例外的に中世都市鎌倉には、中国陶磁が大量に輸入されていたようで、現在の鎌倉市の市街地からの中国陶磁の出土量は、膨大なものであるという。従って、ここでは上層の武士階級の使用する供膳具は、中国陶磁そのものであって、他の下層武士階級の間では、国産の瀬戸窯の施釉陶器製品が使用され、さらに庶民層では、在地生産のロクロ土師器や瓦質土器が使用されるという状況が現出したとみられている。一般的には、東日本での鎌倉幕府の武士を中心とする支配体制が確立されるなかで瀬戸窯の施釉陶器と在地土器の使用区分が定着し、中世においても、いわゆる容器の階層性をもち続けた。かつて、律令国家体制下では、古代の灰釉陶器や緑釉陶器を畿内へ送り、そこから東日本へ、そして律令体制の弛緩からやがて直接的に東日本へそれらの製品を供給していた猿投窯では、施釉陶器を瀬戸窯に譲り、製品の無釉化によって地域向けの日常雑器の生産を拡大させるが、もはや、上層階級向けの生産ではなく、庶民向けの山茶碗生産が主体となっていった。しかし、需要層の期待ないし求めに応ずるかのごとく、日常雑器生産の中でも、かつて古代に意識的に行われたところの、うつわにおける中国陶磁への憧れから来る模倣という行為が働き、12世紀前半から中葉にかけての白磁玉縁口縁碗や白磁四耳壺の忠実な写しのみならず、当時、大量に輸入された白磁碗 XI 類や、やがてそれらに取って代わる龍泉窯や同安窯系の青磁碗・皿類を意識して写したと考えられる器形が12世紀以後の日常容器として採用された。猿投窯において生産された山茶碗に見る器形の変遷が白磁碗から青磁碗へその主流が移っていく過程と同様な形態をとって^(注35)その写しであるかのごとく様相を示している。そして、その影響ないし共存的に同系統の形態変化をみせるのが常滑窯の山茶碗であり、美濃窯（東濃窯）の山茶碗である。

（注）

- 注1. 藤岡了一「奈良・平安の施釉陶」『世界陶磁全集』2 河出書房 1957
植崎彰一『白磁』『日本陶磁全集』6 中央公論社 1976
- 注2. 巽淳一郎「古代の窯業」『古代の都と村』『古代史復元』9 講談社 1989
- 注3. 吉田恵二「緑釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』211 1982
巽淳一郎『陶磁（原始・古代編）』『日本の美術』235 至文堂 1985

- 注 4. 日本書紀 卷十四 雄略天皇七年条
- 注 5. 『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』 榑崎彰一監修 柏書房 1984
- 注 6. 『特別展—海を渡ってきた陶人たち』 図録 吹田市立博物館 1993
シンポジウム『討論会—須恵器の始まりを考える』 吹田市立博物館 1993
- 注 7. 巽淳一郎「古代の窯業」『古代の都と村』『古代史復元』9 講談社 1989
- 注 8. 毛利光俊彦「碗の系譜」『古代の都と村』『古代史復元』9 講談社 1989
- 注 9. 注 2.、注 3.に同じ
- 注10. 斎藤孝正「猿投窯における中国陶磁の模倣とその限界」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注11. 榑崎彰一『三彩・緑釉・灰釉』『陶磁大系』5 平凡社 1983
巽淳一郎『陶磁（原始・古代編）』『日本の美術』235 至文堂 1985
- 注12. 伊野近富「原型としての貿易陶磁とその模倣型について」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注13. 亀井明德『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版 1986
- 注14. 田中 琢「三彩・緑釉」『世界陶磁全集』2 小学館 1979
- 注15. 注 13. に同じ
- 注16. 『鴻臚館Ⅰ～Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 270, 315, 355 福岡市教育委員会 1991～1993
- 注17. 高橋美久二「市の交易の発達」『古代の都と村』『古代史復元』9 講談社 1989
- 注18. 寺島孝一「畿内の緑釉陶窯」『特集・越州窯青磁と平安時代の緑釉・灰釉陶』考古学ジャーナル 211 1982
百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1986
- 注19. 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『特集・越州窯青磁と平安時代の緑釉・灰釉陶』考古学ジャーナル 211 1982
斎藤孝正「猿投窯における中国陶磁の模倣とその限界」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注20. 亀井明德「平安朝輸入陶磁の名称と実体」『考古学雑誌』61-1 1975
榑崎彰一「日本古代の土器・陶器」『世界陶磁全集』2 小学館 1979
- 注21. 注 19. 後段に同じ
- 注22. 吉田恵二「唐の金属器と日本の陰刻花文」『国学院大学考古学資料館紀要』5 1989
前川 要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化』41-5 1989
- 注23. 注 11. 後段に同じ
- 注24. 荒川正明「平安時代緑釉陶器の文様装飾—そのモデルとコピーの視点から」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注25. 注 22. 前段に同じ
- 注26. 矢部良明「晩唐五代の越州窯青磁と平安前期の緑釉陶・灰釉陶の相関関係」『特集・越州窯青磁と平安時代の緑釉・灰釉陶』考古学ジャーナル 211 1982
- 注27. 『鴻臚館Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告 315 福岡市教育委員会 1992
- 注28. 注 24. に同じ
- 注29. 田中克子「北部九州における越州窯系青磁粗製品について」『先史学・考古学論叢熊本大学考古学研究室20周年記念論文集』1994
横田賢次郎・田中克子「大宰府・鴻臚館出土の初期貿易陶磁器の検討」『貿易陶磁研究』14 1994
- 注30. 伊野近富「長沙銅官窯模倣について」『京都府埋蔵文化財情報』第34号 1989
- 注31. 注 19. 後段、前川要「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究上・下」『古代文化』41-8, 10 1989
- 注32. 注 19. に同じ
- 注33. 森 隆「平安時代の磁器型窯業生産」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注34. 注 12. に同じ
- 注35. 注 12. および浅野晴樹「関東における模倣品としての在地土器」『貿易陶磁研究』12 1992
- 注36. 尾野善裕「モデルとコピーの視点からみた古瀬戸と中国陶磁」『貿易陶磁研究』12 1992